大東文化大学　博士学位論文審査報告書

氏　　名	小路口　ゆみ
学　　位	博士（中国言語文化学）
学 位 記 番 号	甲第１５０号
学位授与年月日	平成 30 年 3 月 22 日
審 査 研 究 科	外国語学研究科
論 文 題 目	中国語における“把”構文の研究 ―連語論と通時的視点から―
論 文 審 査 委 員	（主査）大東文化大学教授　大島 吉郎 （副査）大東文化大学教授　山口 直人 （副査）大東文化大学教授　丁 鋒 （副査）東洋大学教授　続 三義

博士論文　審査報告

1．本人履歴、研究の経緯および研究業績

この部分に掲載されている内容については、論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨に関する箇所では無い為、加工がされておりますので、ご了承願います。

2．研究方法、論文の構成と内容

博士学位論文「中国語における“把”構文の研究――連語論と通時的視点から――」（以下、本論文と略称）は、まず「“把”構文」の文構造を「名詞$_1$ ＋“把”＋名詞$_2$ ＋動詞＋その他」と定式化し、日本語文法研究における連語論の枠組（①もようがえ、②とりつけ、③とりはずし、④うつしがえ、⑤ふれあい、⑥結果的なむすびつき）に基づく「変化のむすびつき」の概念を設定することで、その文構造と意味を以下の7タイプに類型化することを行い、「“把”構文」の構造的特徴と構文的意味を明らかにしている。

(1)「意図的な処置の結びつき1」（例：祥子一边吃，一边把被兵拉去的事说了一遍。）

(2)「意図的な処置の結びつき2」（例：他得把这群猴崽子当作少爷小姐看待。）

(3)「非意図的な処置のむすびつき」（例：把车轴盖碰丢了。）

(4)「動作の範囲・場所の結びつき」（例：你把里里外外再检查一遍。）

(5)「使役のむすびつき」（例：又待了一会儿，西边的云缝露出来阳光，把带着雨水的树叶照成一片金绿。）

(6)「心理活動の結びつき」（例：他把这件事渐渐忘掉，一切的希望又重新发了芽。）

(7)「第三者の受け身のむすびつき」（例：把个囚犯给跑了。）

本論文の理論的基礎を成す「変化のむすびつき」とは、主体、並びに客体における空間、時間、状態、認識の変化を統合的に記述したものであり、「変化のむすびつき」という概念は、これら7種類の類型的要素によって統合された構文的意味であるとの説には、先行研究には見られない新たな見解として強い独自性がうかがえる。

本論文（本文253頁、用例参考データ95頁、全348頁）は以下に示す如く、序章、終章のほかに本論全三部十二章によって構成されている。

序論

第一部　現代中国語における“把”構文の特徴

　第一章　「変化のむすびつき」とは

　第二章　“把”構文の客体について

　第三章　“把”構文における動詞について

　第四章　“把”構文における「その他」について

　第五章　実例からみる“把”構文の日本語訳の傾向

第二部“把”構文が存在する理由

　第六章　「“把”＋空間詞」の“把”構文について

　第七章“把”構文における使役表現について

　第八章“把”構文における副詞の位置について

第三部 近代中国語における“把”構文

第九章 『語言自邇集』初版（1867年）における“把”構文について

第十章 『北京官話伊蘇普喩言』（1878年）における“把”構文について

第十一章 『官話指南』（1881年）における“把”構文について

第十二章 『北京官話今古奇観』（1904、1911年）における“把”構文について

終章

序論では、研究の目的と意義、研究の範囲と独自性、主な先行研究、構造の角度からの研究、論文構成について述べる。第一部では、行為の対象である客体の定性に関する分析、述部の中心となる他動詞のふるまいを「結果類」、「情態類」二類に分けての分析、及び動詞に後置される補語成分についての分析を進め、第二部では、客体が空間詞である場合、主体がヒトではない「“把”構文」の「作用使役」としての使役用法（例えば、“山风把断断续续的歌声吹散开在高原上。”）、“都”“再”“又”等副詞の位置とそれに関連する意味の射程の問題を明らかにし、第三部では日本明治期における代表的北京官話テキストである『語言自邇集』初版（1867年）、『北京官話伊蘇普喩言』（1878年）、『官話指南』（1881年）、『北京官話今古奇観』（第一集1904、第二集1911年）における「“把”構文」7種の類型について分析を進め、第一部、第二部で得られたデータとの照合を行うことによって、近現代における「“把”構文」の変化の軌跡を概略描き出すことに成功している。このような共時的研究と通時的記述を総合的に組み合わせる研究手法は、「“把”構文」を扱った従来の研究に先例を見ない。19世紀後半、明治期における北京官話学習者がどのようなプロセスを経て「“把”構文」を習得して行ったのか、新たな問題点を提起するとともに、「“把”構文」に生起する動詞をつぶさに観察、記述し、当時における常用動詞の範囲を示した点も通時的研究に一石を投じている。一般に、常用動詞とはどのような範囲までを指すのか明確な基準を示すことが困難であるが、本論文はその一つの基準として「“把”構文」に生起する動詞は常用動詞の一部分を形成するとの仮説を提示したことの意義は大きいものと考えることが出来る。

3．研究の成果および評価

本論文の主な研究成果は以下の3点にある。第一点は、「“把”構文」の研究は中国において文法研究の主流を成しており、これまでに伝統文法、構造主義、生成文法、認知言語学等からのアプローチによる膨大な研究の蓄積があるが、本論文は“把”の文法化及び意味（イメージスキーマ）を「処置」であると規定した王力（1943）を始めとして、約70年間にわたる主要論文を渉猟し、各論文の要点、論点を整理し、その中から崔顕軍（2012）を考察のための最もふさわしい基準、理論的支柱に定めると同時に、「“把”構文」の本質意味は「変化のむすびつき」であると定義付けを行い、分

析と記述を行った研究手法が本論文に一貫性をもたらすものであることを挙げることが出来る。第二点は、「“把”構文」を構成する主要な成分である「主体（名詞$_1$）」、「客体（名詞$_2$）」、「動詞」、「補語等その他」について個別に詳細な分析を行い、これまで十分には解決されていなかった問題に焦点を当て、一見すると関連性を見出し難い「“把”構文」を構成する主要な要素が緊密に結びついている実態を明らかにし、構文論的解釈の妥当性を得ている点が挙げられる。第三点は、先にも述べたように、現代中国語における「“把”構文」の総合的分析を経て得られた知見を基に、通時的視点から、明治期における規範的北京官話のテキストを言語資料として、「“把”構文」の具体的用法が7種の類型に沿って叙述、分析されており、現代語との連続性並びに相違点を指摘した点が挙げられる。個別の研究テーマにおけるこのような成果は研究手法として汎用性を持ち、今後の文法研究にとって大きな影響を与えることが期待される。

４．結論

以上の審査内容、評価に基づき、本論文を審査対象とする学位論文審査委員会は、全員一致をもって、本論文は博士（中国言語文化学）の学位を授与するに値するものと判断し、ここに報告する。

以　上